

2017年度 SF入学試験	学部	文	試験科目	小論文
------------------	----	---	------	-----

別紙解答用紙に解答すること。

問 以下の二つの新聞記事①と②を読んで、スポーツと国籍の関係について、考えるところを800字以上1000字以内で述べなさい。

記事①

2010年10月3日の引退相撲で11年間の土俵人生に幕を引いた元朝青龍。最後の土俵入りでは無数のカメラのフラッシュと大声援を全身で浴び「現役を思い出した」と目を潤ませた。

続く断髪式には米国、ロシアなどの企業経営者も参加。モンゴルのバトボルド首相があいさつするなど国際色豊かなものとなった。元WBCフライ級王者の亀田興毅は「永遠のヒーローだし、まだ相撲を取ってもらいたい」と土俵に上がったものの、まげにはさみを入れられなかった。師匠の高砂親方（元大関朝潮）は「経験を良い意味で生かして頑張ってもらいたい」と第二の人生をスタートさせる弟子にエールを送った。

大銀杏（おおいちょう）を落とした元朝青龍は「生んでくれたモンゴルと、育ててくれた日本。2つの国を愛している」と感謝。最後に土俵にキスをして別れを告げた。生まれ変わったら「大和魂を持った日本人として横綱になりたい」という元朝青龍。その後の会見では、「日本の文化を守れる日本人が出てこない。外国人の横綱でもいいけど、ここは日本だから」と日本人横綱の誕生を期待した。

（『産経新聞』2010年10月4日）

記事②

大相撲の琴奨菊は、嘉風に勝って連勝。「日本出身力士10年ぶり優勝」の喜びは「18年ぶり日本人横綱誕生」の期待へと変わっている。でも、なぜそんなに「日本」にこだわるの？

「日本出身」報道に違和感 大島勝さん（元関脇旭天鵬・大島親方）

「日本出身力士、10年ぶりの優勝」「18年ぶり日本人横綱誕生へ」って、事実は事実だから言いたいのは分かります。だけど4年前、自分がモンゴルから日本に国籍を変えて優勝している。だから「日本人、4年ぶり」でもあるのに「日本出身」ばかりだったから、違和感があります。

国籍を変えるって覚悟がいる。自分の場合、モンゴルで裏切り者って批判も受けました。それでもいいと思ってるけど、こういう言葉の使い方をされると、日本人になった自分の優勝が消されている感じで寂しい気持ちになるね。

日本人になろうと思ったのは、相撲しか知らなかったから。17歳で日本に来て、引退後のことを考えたとき、相撲以外に頭に浮かんでこなかった。親方になるには日本国籍が必要。だったら取ろうと。

もちろん日本にずっと住みたいという気持ちもありました。巡業で外国に行くと、やっぱり日本がいいと思う。食事に行くと、おしぼりと水がすぐ出てくる。一つ一つがこっちに

慣れていて、モンゴルに帰っても、合わないなと思うときがあるくらい。身も心も日本になじんでいるんだと思うんです。

日本人がモンゴルでモンゴル相撲を取ったらブーイングを受けると思う。でも日本では、ないよね。今の上位陣はモンゴル勢ばかりだけど、応援の声はしっかり盛り上がる。ファンは純粋に楽しんでいるんだと思います。

ただ、みんな身近な人を応援したいのは当然ですから「日本出身」「日本人」を応援したいっていう気持ちは分かりますよ。だから、最初は「へえ、こういう表現があるんだ」くらいで気にしなかった。それが、初場所、新聞やテレビでどんどん使われるようになって、どんどん違和感が膨らんでいった。言葉の使われ方、報道ってすごく重いんだと思いますね。

初場所が終わった5日後にレスリングの伊調馨選手がモンゴル人に負けた。そうしたらモンゴルでは、「10年ぶりに（大相撲の）賜杯（しはい）は奪われたが、13年ぶりに日本の女王に黒星を付けた」と、うつぶんを晴らすように報じられた。スポーツには、そういうのはない方がいい。やる側はその競技の中で1位を狙っているだけだから。相撲だって番付の中で裸一貫で競っていて、そこに国境は感じてないと思います。

角界で不祥事があつたとき、先頭に立って引っ張ったのは横綱の白鵬関です。その姿を見てお相撲さんみんなが「頑張ろう」っていう雰囲気になった。日本人とかモンゴル人とか関係なかった。日本人横綱を期待するのは分かりますが、その辺をもう少し配慮した報道だったり応援だったりしたら、やる側は気持ちよくやれるんじゃないかな。

（『朝日新聞』2016年3月15日 一部改変）

以上